

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520287

研究課題名(和文) イングリッシュネスのなかのカソリシティ - - 新しい伝統の創成過程研究

研究課題名(英文) Catholicity and Englishness--Formation of a New Tradition

研究代表者

野谷 啓二 (Notani, Keiji)

神戸大学・その他の研究科・教授

研究者番号：80164698

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：「異形なもの」としてイングランドの体制文化を聖化する役割を担われてきたカトリシズムは、体制文化こそ本来の姿からの「逸脱」だと批判し、カトリック中世の価値を主張することで、イングリッシュネスの回復を主張した。G.K.チェスタトン、H.ベロックなどのカトリック者は、物質主義による霊的価値の喪失、帝国主義が愛国心に誤読されたことに刺激され、一つのヨーロッパを実現していたクリスダムに再接続される必要を感じた。アングロカトリックのT.S.エリオットも、17世紀のアングリカニズム内部にあったカトリック性をイングリッシュの根幹に位置付けた。総じてカトリック的立場に立つ人々の志向性は反近代主義にある。

研究成果の概要(英文)：The research elucidates how Catholicism came to form a basis of Englishness by looking into the works of G.K. Chesterton, Hilaire Belloc, and T.S. Eliot. Since the Reformation and in the process of building and strengthening a nation state, English Catholicism had been presented as heterodoxy, performing a cultural and political role of sanctifying the established culture. This alienation from the main, however, stimulated Catholic intellectuals to turn their minds to the source of real Englishness, which they found in pre-modern times. Dismayed by sheer materialism and the imperialistic expansion of England through cosmopolitan finance, Catholic thinkers idolized Little-Englandism. Anglo-Catholic Eliot also tried to resuscitate catholicity in the Protestant faith of the Established Church. Catholic intellectuals' movement to put forward the anti-modernistic values shows the growth of Catholic element in English culture.

研究分野：英文学

キーワード：カソリシティ G.K.チェスタトン H.ベロック T.S.エリオット 反近代主義

### 1. 研究開始当初の背景

イングランドが16世紀の宗教改革によってプロテスタントを国是とするネーションと自覚し、17世紀の内戦期には、国教会の内実をめぐってピューリタン勢力と、カトリックとプロテスタントの中道を理想とする勢力が争うが、結局は、名誉革命によって、国民国家を統合する機関として中道の国教会が温存され、ローマのカトリシズムだけが排除されることが合意された。カトリック信徒が市民権を認められるのは19世紀前半のカトリック解放令を待たなければならなかった。プロテスタントの国民教会制度は、イングランドが国民国家から帝国へと成長する歴史的発展過程のなかで、カトリック国ではなく、イングリッシュ・ネーションこそが「神の選び」のなかにあることを実感させ、カトリック信徒とその文化アイデンティティを疎外し、No Popery!(「カトリックは出て行け!」)という標語によって、彼らを異化し、プロテスタントの体制文化を醸成・強化させた。

しかしながらヴィクトリア時代以降、今日に至るまで、カトリック文化のイングリッシュネスへの受容研究は、国内においては言うに及ばず、英米においても進捗していないように思われる。英米の研究はカトリックサイドから行われるものが主であり、その論調はカトリック差別の歴史、マイノリティの悲哀をベースにする護教的なものである。新しい千年期に入った今日、元首相トニー・ブレアのローマ・カトリック教会への入信が問題なく迎えられ、2010年のジョン・ヘンリ・ニューマンの列福式が教皇ベネディクト16世によって祝われた際のメディア報道を見ても、カトリシズムはほとんど違和感なく受容されているようである。この150年間に何が起きたか、元来異文化とされたカトリシズムがどのようにイングリッシュネスに包摂されたか、今こそ問われる必要がある。

近年、政治学・社会学との学際研究としてアイデンティティ・ポリティクスに対する関心が高まっている。イングランドについては Arthur Aughey, *The Politics of Englishness* (2007); Robert Colls, *Identity of England* (2002); John Grainger, *Patriotisms: Britain, 1900-1940* (1986); Edwin Jones, *The English Nation* (1998); Krishan Kumar, *The Making of English National Identity* (2003)の研究があげられる。こうした研究に英文学研究の側からキリスト教文化の視点をういて寄与することはできないだろうか。高柳俊一『英文学とキリスト教文学』; J.P. Corrin, *Catholic Intellectuals and the Challenge of Democracy* (2002); Michael Wheeler, *The Old Enemies: Catholic and Protestant in the Nineteenth-Century English Culture* (2006)などの研究をあわせて考察してみる必要があるだろう。異なるものが単純な同化ではない形で、どのように規

範文化に入り込み、その性質を変更させたのか、そのコンテキストと実例を検証してみようとする研究は、これまでにない地平を開くものである。

### 2. 研究の目的

近代国民国家イングランドはナショナルアイデンティティを構成する文化伝統・規範としてプロテスタントを選択した。本研究は、その外に位置し、それゆえ常に否定的な意味しか与えられず、「異形なもの」としてイングランドの主要文化を聖化する役割を担わされてきたカトリシズムが、どのような言説によって English literature として組み込まれる作品を生み出したのかを考察する。イングランド文化を規定するイングリッシュネスにカトリシズムの価値体系がいかに対峙され、どのようにカソリティがイングリッシュネスに包摂されたのか、20世紀における二人の代表的カトリック作家、G.K. チェスタトン、そしてその盟友であった H. ペロックと、イングリッシュネスとカソリティの二つを理念的に一つのものとして体現するアングロ・カトリシズムの文人・思想家 T.S. エリオットを中心に検証する。

### 3. 研究の方法

本研究は3年計画で進める。まず一般に受け取られている以上に重要な批評家チェスタトンの実相を明らかにし、つぎにエドワード時代のカトリック文芸復興期の精神的支柱であったペロックの思想的特徴を彼の最初の小説作品を中心に分析し、さらにエリオットの「イングランド人になる」個人的計画がどのようにイングリッシュネスのカトリック化と重なり合うものであったかを考察する。チェスタトンとエリオットがともに改宗者であること、愛国心、小イングランド主義、フランスのカトリシズムからの影響を考察する。彼らの営為、特に文学批評活動を分析し、ニューマンから始まったカトリシズムの、伝統の再発見による新しい正統・正典の創造経緯を明らかにする。

### 4. 研究成果

(1) 反近代主義的な思想的立場を明確にするカトリシズムがイングリッシュネスの根幹にあるプロテスタント的近代主義に接続させるためには、近代の国民国家を維持、強化するナショナリズムに対して、中世キリスト教世界の規範であった汎ヨーロッパ主義が対抗軸として提示される必要があった。エドワード時代には「正しい愛国主義」をめぐって拡大主義的な帝国主義礼賛と、カトリック的な心情を共有する人々らによる小イングランド主義による愛国主義の主張のせめぎ合いが見られた。最も重要な意味を持つことが理解された。

ヴィクトリア時代後期に生まれ、世紀末に成人し、エドワード7世時代にジャーナリス

ト、批評家、作家として、反時代（反近代主義）的な言説を発表して名を成した G.K. チェスタトンは、わが国ではもっぱらブラウン神父ものの推理作家としての姿が強調されているが、チェスタトンは世紀末の無神論と戦い、(アングロ・)カトリシズムに生きるようになっていた。ポーア戦争を契機に当時の体制派の誰もが受け入れていた(フェビアン主義者ら社会主義者、リベラル派すらも支持していた)「大英帝国主義」を明確に拒否し、イングランド精神の真のあり様を全ての民族、国家の自治を保証する patriotism に求め、他国、他民族を飲み込み無限に拡大する帝国主義を批判した。近代の悪弊の起源を宗教改革に求め、中世に問題解決の理想型を見たのである。

チェスタトンが盟友であるヒレア・ペロックとともに、フェビアン協会の主要メンバーであった英文学の大立者、G.B. ショーと H.G. ウェルズの社会主義に対抗したことは、周知の事実であるが、社会主義に対する疑惑を自らの哲学とショーのそれとを対比させながら語っている箇所が、チェスタトンの『自伝』にも見られる。チェスタトンがイングランドの一般民衆とその伝統文化に対して強い愛着を抱いており、それが彼の愛国心の中核をなしている。愛国心がショー、ウェルズの世界主義、四海同胞主義よりも根本的に優れている点として、彼は愛国心によってすべてのものを抽象的概念としてではなく愛することができることを挙げ、「四海同胞主義は一つの国を与えてくれ、それはなるほど良いものなのだが、愛国心は百の国の存在を認めてくれ、しかもその一つひとつがすべて最善の国なのだ」(Cosmopolitanism gives us one country, and it is good; nationalism gives us a hundred countries, and every one of them is the best.) と、愛の対象に求められる個別性が絶対不可欠であるという信念を強調する。

もう一つ重要なことは、ショーの「超人」との比較対照から、チェスタトンが人間の限界性に否定の意味ではなく、むしろ聖性という肯定的価値、祝福を見出している点である。ショーのようにものを考える人は、帝国主義者が拡大を信仰しているのとまったく同じように、進化を信じている。彼らは生長する木のようなものを信じているが、自分が信じているものは花と実であり、花はしばしば小さく、実には形があり、それゆえに限界がある(it has a form and therefore a limit)。こうした基本的信念から、人は進化して超人となるよりも、限界を認識することによって、聖性を帯びた存在となるという逆説をチェスタトンは説く。彼はその範型として、神が小さな人となったこと、すなわち「受肉」というキリスト教信仰の中心的なドグマを指摘する。受肉こそが彼の人間観の根源をなすのである。

「小」と「限定」がチェスタトンの思想の

鍵語であり、それを愛国心に適用すれば、当然、小イングランド主義となり、現実として帝国化しているイングランドに対して批判の言葉を浴びせ、中世の時代の自文化に還ること、少なくともその文化を誇りとするよう主張することになる。共通のキリスト教信仰(カトリシズム) いざとなれば武器を取って戦うことを厭わないイングランド人の同志関係、つまるところ、チェスタトンが「イングランドらしさ」と考えるものが、異端者、絶対禁酒主義者、国際平和主義者によって、プロテスタンティズムの近代主義に淵源を持つものによって失われてしまった、このような中世主義的歴史観を見て取ることができるのである。チェスタトンに中世主義、すなわちイングランドにおけるカトリシズムがまだ信仰として勢力を有していた時代に対する思い入れがあることは、彼が『自伝』のなかで、彼特有の諧謔精神を發揮してつぎのように記していることから窺える。私にとって「クラパム・ジャンクション」(Clapham Junction)よりも「クラパム・コモン」(Clapham Common)の方にずっと関心があると。彼は英国最大の乗換駅であるクラパム・ジャンクションを世界に広がる植民地への、そして植民地からの物流のイメージに重ね合わせ、小イングランド独自の物産、文化を軽んじる帝国主義の象徴とし、宗教改革後に現われた新興貴族に簞奪される前の、中世の共有地の名前を留めるクラパム・コモンの方を称揚するのである。

以上のようなチェスタトンの思想に多大な影響を及ぼしたのはヒレア・ペロックであった。彼はヨーロッパ近代の病根を治癒させるためにはまずカトリックにならなければならないと主張したのだが、それは実現性がない絶望的なものと言わざるを得ないだろう。しかし、ペロック自身の世界観を支える歴史認識からすればその言説には矛盾がなく、イングランドを再生するための新しいイングリッシュネスの要素として、宗教改革以前のカトリックの価値観を取り戻さなければならないという、生涯にわたる活動を支える原理となっている。

ペロックがこのような反近代主義的な言説を公に唱えるができたようになったのは、一九世紀前半にアイルランド問題を契機にカトリック信徒の解放が行なわれ、ジョン・ヘンリ・ニューマンらが主導したオックスフォード運動によって、カトリック教会の復興[具体的には司教区制度の回復]の機運に弾みがつけれ、カトリック信徒のなかからも「知識人」が出てきたことによる。カトリック知識人 その多くはイングランド教会からの改宗者 が、一様に持っている特徴は、反近代の姿勢であった。彼らは知的な確信に基づいてカトリック教会を意識的に選択したのだが、一九世紀の知的、文化的潮流に対立、また対抗する価値観の権威ある提示者としての「教会」に引き寄せられたのであ

る。一九世紀のイングランドで隆盛を極めた、一六世紀の宗教改革を高く評価するプロテスタントの進歩史観によってカトリック中世の価値を否定されたカトリック信徒が、近代よりも中世を高く評価するのは当然のようにも考えられるが、彼らが西洋近代に対して危機意識を持ち、アンチモダンになる契機となったのは、物質主義による霊的価値の喪失、拝金主義、ペロックのエッセイ「高利貸し」論が非難する、額に汗せず効率よく「お金でお金を作る」(money makes money)ことを良しとする思想に、人間性の喪失を見たことにある。彼らは、西洋近代の神の喪失の流れに抗して、宗教改革以前のいわゆる「メリー・イングランド」の理想に帰ることを希求したと言えよう。資本主義と帝国主義の、すなわち近代の、宗教改革以降のイングリッシュネスは、本来のイングリッシュネスとは異なると、ペロックは言いたいのである。真のイングリッシュネスとして、ペロックは小イングランド主義を考えているのである。反近代主義の闘いの同志であったチェスタンの『ノッティング・ヒルのナポレオン』が示しているように、小イングランド主義こそが真のイングランドを再興させる原理であると、ペロックは信じて疑わなかった。『エマニュエル・バーデン』のなかで、民衆がいついバーネットのような人物に対して抱いてしまう気持ちとして書き込まれている、「国際金融 情け容赦なく、民族の理想をすべて破壊し、反道徳的で、ヨーロッパの伝統の核心を食いつぶすもの」という批判は、二一世紀を生きる我々にも深い反省を呼び起こさせる。ペロックは時代からの挑戦を受け、自らのカトリック・アイデンティティを支えに、近代の「悪」を見据え、預言者的な批判を加えたのであった。リーマンショックの一世紀も前に、帝国主義のお膝元のロンドンで、小イングランドこそが真のイングランドの姿であると信じていた一群の人々がいたことを忘れてはならないだろう。

カトリシズムをイングリッシュネスに含まれるべき価値の体系として広く認知させるのに決定的役割を果たしたのは間違いなく T.S.エリオットである。1927年6月末の受洗に帰結するエリオットのアングロ・カトリシズムへの回心の翌年の11月に刊行されたエッセイ集『ランスロット・アンドルーズのために』の「序文」において、エリオットは自身のアイデンティティを三つの言葉で規定して見せた。すなわち“The general point of view may be described as classicist in literature, royalist in politics, and anglo-catholic in religion”である。この自己理解はエリオットという人間と、彼が書き残したものを理解するための、きわめて重要な鍵を提供してくれるものであるように思われる。キリスト教の根幹である神理解、すなわち、「一つにして三つ、三つにして一つ」である「三位一体」の教義の

ようにも見なすべき価値を持つものとさえ言えるのではなからうか。

『ランスロット・アンドルーズのために』は保守反動主義者エリオットの誕生を告知する文集であり、序文における「文学においては古典主義者」、「政治においては王政主義者」、「宗教においてはアングロ・カトリック」という宣言は、第一義的にはヴィヴィアンとの結婚の破綻から、エリオットがいかに自己を再生させようと計画しているのか、その指針を規定しているものと思われる。無秩序と化し混沌とした私的生活を統御するために、何らかの権威を有する存在を希求した結果が受洗だったのであり、それは人生の転回点、まさにコンヴァージョンとして、自己革新の契機として到来したのであった。キリスト教信仰の受容に至る自身の思索が反映された文集が『ランスロット・アンドルーズのために』である。宗教的には、自らの信仰問題に決着をつけ、新たな人生を歩む決意を公的に発信するものであり、文学的には、モダニスト詩人たることをやめ、神を求める求道者の精神の動きを詩にするモラリスト詩人となること、そして思想的には、ブルームズベリー・グループの世俗的リベラリズムに明確に背を向けるアンチ・モダニストたらしんとする「マニフェスト」であり、前半生と後半生を結ぶ結節点にある文書と言えよう。

しかし、エリオット個人の反近代主義的(アンチモダン)な文化政治学のマニフェストとして理解される三つの自己規定は、それだけにとどまらず、それまでの支配的イングリッシュネスに、カトリシズムの価値体系を対峙させ、結果的にイングリッシュネスに catholicity (普公性)を包摂させようとする試みであったと思われる。三つのアイデンティティを考察することは、17世紀にサマセットシャーからアメリカに渡った祖先の道を逆行してイングランド人となった「移住者」、「越境者」であるエリオットが、戦間期において、なぜ17世紀初めのジャコビアン時代のイングランド社会のありように理想を見出すのか、また、イングリッシュネスの伝統を構成するものとして、19世紀までにすでに確立していたプロテスタント主義を、ヨーロッパ主義を含むものに書き換え、ジョン・ヘンリ・ニューマンらのオックスフォード運動によって国教会内部に再発見された普公性(カソリシティ)をさらに活性化し、英文学の新しい正典(キャノン)の創造によって確定させようとしたのか、より大きな問題を考える糸口にもなる。

エリオットの「イングランド人になる」という個人的計画は、イングリッシュネスのカトリック化の試みと並行するものであった。「伝統と個人の才能」の応用編として1923年に発表された「批評の機能」で、エリオットは自己の文学上の立場を明確な反ロマン主義、すなわち古典主義者と規定する。彼は

古典主義とロマン主義の違いを、前者が「完全で、成熟した、秩序あるもの」とし、後者を「断片的で、未熟で、混沌としたもの」と断じた。文芸上の特徴が価値的な判断基準に還元されるわけである。このエッセイで攻撃の標的になっているのは J.M. マリーである。エリオットはマリーが根拠もなくロマン主義をイングランドの民族的特質としていることに異を唱え、マリーの「内なる声」(the inner voice)に信頼を寄せる態度を厳しく批判する。内なる声さえあれば原則など入らぬといった考えは、批評が機能する共同体の存在を無視するものであり、それではバラバラな個人主義が跋扈する社会となってしまう。エリオットは「真の判断の共同追求」(the common pursuit of true judgment)を可能にする「共通原則」(common principles)を重要視する。「内なる声」などに信頼を寄せれば、「虚栄、恐怖、肉欲」(vanity, fear, and lust)<sup>11</sup> のメッセージを聞くだけであり、一言で言えば「ホイッグ主義」(Whiggery)に墮落するからである。そもそもエリオットにとって混沌とした自己に秩序を与えること、自分を律することが肝要なのである。「他には見られない地位を獲得するためには、芸術家は自身の外に、何かしら臣従の義務を負うもの、自己を放棄し犠牲にしなければならない帰依」を必要とするとエリオットは信じている。彼は宗教的な言辞を使って個人が自己奉獻する対象を持つことの重要性を説いているが、自己表現にのみ集中し、自己を奉獻することができない芸術家は、二流の存在に甘んじることになると考えるわけである。エリオットによれば、この自己の外に客観的に存在し、個人が臣従の義務を負うものを政治的に言い表せば「君主」(monarch)、宗教的には「教会」(a Church)、そして文学的には「古典主義」(classicism)となる。この 1923 年における考えを基盤に、25 年の精神的危機をくぐり抜け、27 年の回心、洗礼、そして 28 年秋の三つのアイデンティティ宣言となると思われる。ここで確認されるべきは、三位一体の神と同じように、自己救済のために必要な規範の文学と政治と宗教信仰の面での現れ方は異なるが、その実体は同じもの、一体のものであるということである。

#### (2) 今後の展望

英文学研究におけるキリスト教理解の必要性は広く認識されているが、実際の研究実績からすれば、依然として不十分であるといわざるを得ない。特に政治的、文化的マイノリティであったカトリシズムの観点から英文学を考察するものは極端に少ない。本研究はこうしたびつな状況を是正しようとする。文学作品だけではなく、キリスト教神学、教会史、イングランド史の研究成果を取り入れようとする学際的研究を志向するところに特色がある。近代国民国家の中核に位置したイングランドのプロテスタント主流文化のなかで、カトリシズムはどのようなものと

して表象され、また自己をどのような形で提示し、イングリッシュネスのなかに包摂されたかという問題設定は、国民国家内の規範文化と対抗文化の関係研究として、人文学研究から社会科学研究分野へ発信するものとして意義がある。20 世紀カトリック文人の「イングリッシュネス」を書き換えた言説を効果的に研究するためには、歴史的にカトリシズムがイングランド人の想像のなかにどのように意味を持つものとして定着していたか明らかにしなければならない。カトリシズムをめぐる政治・文化状況を、少なくともカトリック・ルネッサンスが起こったヴィクトリア時代にまで遡り、本研究の特色としてあげた文学、歴史学、神学の学際的研究方法を駆使して理解する必要がある。本研究は、ヴィクトリア時代以後、とみに世俗化するイングランド社会を是正する理念としてヨーロッパのキリスト教価値観を導入しようとしたチェスタトンの思想と、アメリカから帰化し、アングロ・カトリシズムを選択して、イングリッシュネスの中枢に位置することに成功したかに思えるエリオットの「戦略」を考察したが、今後も継続的に研究する必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

野谷 啓二、ヒレア・ペロックの反近代主義 『エマニュエル・バーデン』における国際金融資本批判、国際文化学研究、査読無、44 号、2015、刊行予定

野谷 啓二、T.S.エリオットの三つのペルソナ 新しいイングリッシュネスと自己の創造のために、近代、査読無、112 号、2015、1-36

野谷 啓二、Christopher Dawson Looming Large in Eliot Studies、T.S. Eliot Review、査読無、No. 25、2014、42-51、(B.G. Lockerd, ed., *T.S. Eliot and Christian Tradition* の書評)

野谷 啓二、G.K.チェスタトンの愛国心 『ノッティング・ヒルのナポレオン』を読む、近代、査読無、110 号、2014、1-33

〔学会発表〕(計 1 件)

野谷 啓二、T.S.エリオットの三つのペルソナ、日本 T.S.エリオット協会、2014.11.9、神奈川大学(神奈川県)

〔図書〕(計 2 件)

モース・ペッカム、上智大学出版、悲劇のヴィジョンを超えて、2014、464、翻訳(高柳 俊一、野谷 啓二、共訳)

ノーマン・タナー、教文館、新カトリック教会小史、2013、304、翻訳（野谷 啓二 単訳）

6 . 研究組織

(1)研究代表者

野谷 啓二 (NOTANI, Keiji)

神戸大学・大学院国際文化学研究科・教授  
研究者番号：80164698